

天辺の時代

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

サブスクリプション

息子たちが巣立つてからというもの、お盆休みは特別な行事もなく、外も暑いものだから、もっぱら室内で映画を観ている。それもとくに観たことのある昭和の映画が中心だ。

今年の夏はちょっとしたきつかけで東宝映画のサブスクリプションに登録した。そのため、松竹が観たかろうが、日活が観たかろうが、東映が観たかろうが、大映が観たかろうが、はたまた洋画が観たかろうが、生来ケチ精神が身についている関西人の私としては、グッと我慢して、東宝を観続けるのであった。

とは言え、東宝だけでも十分すぎるほど観たい映画はある。私の場合

は、一九五六年から一九七〇年まで毎年二〜四本製作され、合計三三作品を数える喜劇「社長シリーズ」であれば何回でも観られる。それらに飽きたら、巨匠監督と呼ばれた成瀬巳喜男や黒澤明たちの作品を観るか、加山雄三の若大将シリーズを観れば良い。童心に返れば特撮物も楽しめる。

高度経済成長期の追体験

私と同年配か先輩でないとなかなか御覧になっていないかもしれないが、社長シリーズは日本映画の宝だと思う。森繁久彌が社長、小林桂樹がその秘書、加東大介と三木のり平が総務や営業の部課長、フランク堺が毎回異なる特徴的な役

どころを演じ、そこに東宝の誇る女優陣が花を添えるというのが定番。元々東宝は東京宝塚劇場だから、社長夫人はずっと久慈あさみ、初期の作品には越路吹雪や八千草薫、中期には新珠三千代と、元宝塚歌劇のスターたちも登場する。

さて、私がこのシリーズを繰り返し楽しめるのは、森繁たち一流俳優陣のアドリブ演技の軽妙さ、面白さもあるが、何と言っても、日本の高度経済成長と並走する形で作られ続けていた稀有のシリーズもので、尚且つ、その経済成長の担い手であり、恩恵の受け手でもあった企業社会を面白可笑しく描いていて、あの時代を追体験できるからである。

高度経済成長期に製作された映

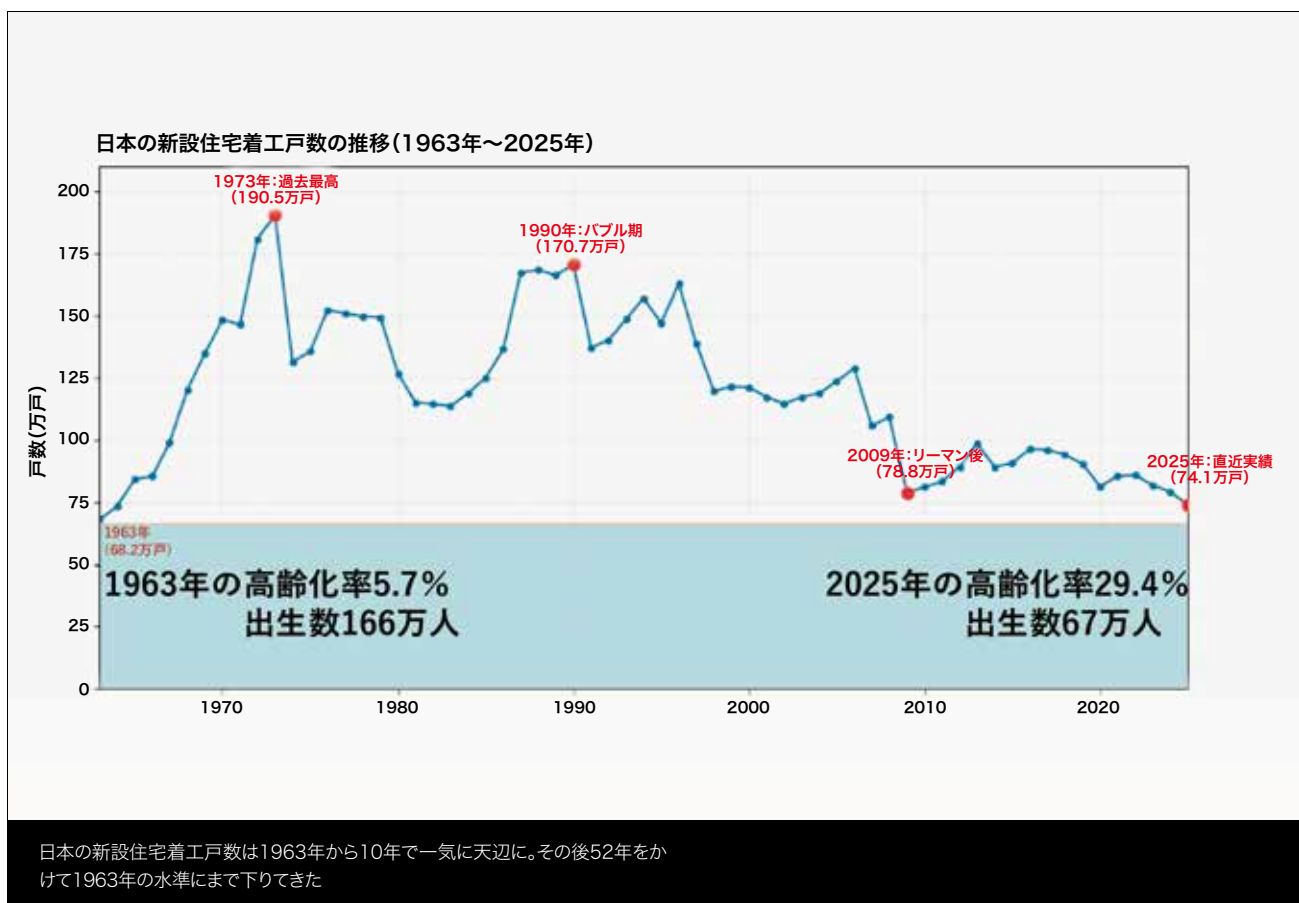
いることから「百窓」とも呼ばれた個人住宅」に牛乳瓶を置く配達員の姿が出てくる。

天辺も還暦

高市首相が「もう一度天辺……」と言われたが、前の天辺がいつだったのかと、話題になることがある。パブルは短期間で崩壊したので、私は「社長シリーズ」の高度経済成長期のことかなと想像している。そうだとすると、もう還暦、六〇年も前のことである。

図で示したのは一九六三年から二〇二五年までの年間新設住宅着工戸数の推移だが、一九七三年までの経済成長の様子がよくわかると同時に、その後ゆっくりと減少し、二〇二五年にはほぼ一九六三年の水準に戻ったこともわかる。

ただし、この二つの年の出生数と高齢化率は全く違う。同じ土俵での天辺はもう目指せない。私たちは違う土俵で稽古をつけなければならぬのだ。



建設業的な見どころ

毎回違う地域にロケに出ているので、日本各地のあの時代の風景を懐かしむことができるのもまた楽しいが、高度経済成長期だから、それぞれの風景を新しいものに変えていく建設行為や建造物が次々に出てくるのも、建設関係者としては嬉しい。

いくつか印象深い例を挙げておこう。一九六三年の正月映画だった「社長漫遊記」は、塗料メーカーの森繁社長一行が、その製品が防錆塗料として用いられた若戸大橋の開通式に招待されるという話。今では国の重要文化財となった若戸大橋の初々しい姿が映し出される。

一九六五年一月に立て続けに封切られた「社長忍法帖」と「続社長忍法帖」では、森繁はゼネコンの社

長役なので、建設関係者には必見なのだが、東京オリンピックを経て景気が一段落した時期の資金繰りと受注競争が主題になっていて興味深いうえに、前年に開業したばかりの札幌ホテル三愛(札幌パークホテル)と大阪新阪急ホテルが出てくるのも嬉しい。後者は惜しくも二〇二五年に閉館し、前者も二〇二七年二月には閉館予定。いずれも築後六〇年を経て再開発の対象になったのだ。

「続社長忍法帖」では、当時の東京新八景として、羽田空港、東京港十モノレール、赤坂見附の立体交差、皇居周辺、代々木と駒沢のオリピック競技場、赤羽台団地、新宿民衆駅が紹介されている。

変わり種としては、一九六八年一月封切りの「社長繁盛記」の冒頭、当時若手建築家だった故林泰義さんと富田玲子さんが設計した、今はなき「試みられた起爆空間」(二五の丸窓が建物の立面四面に付いて